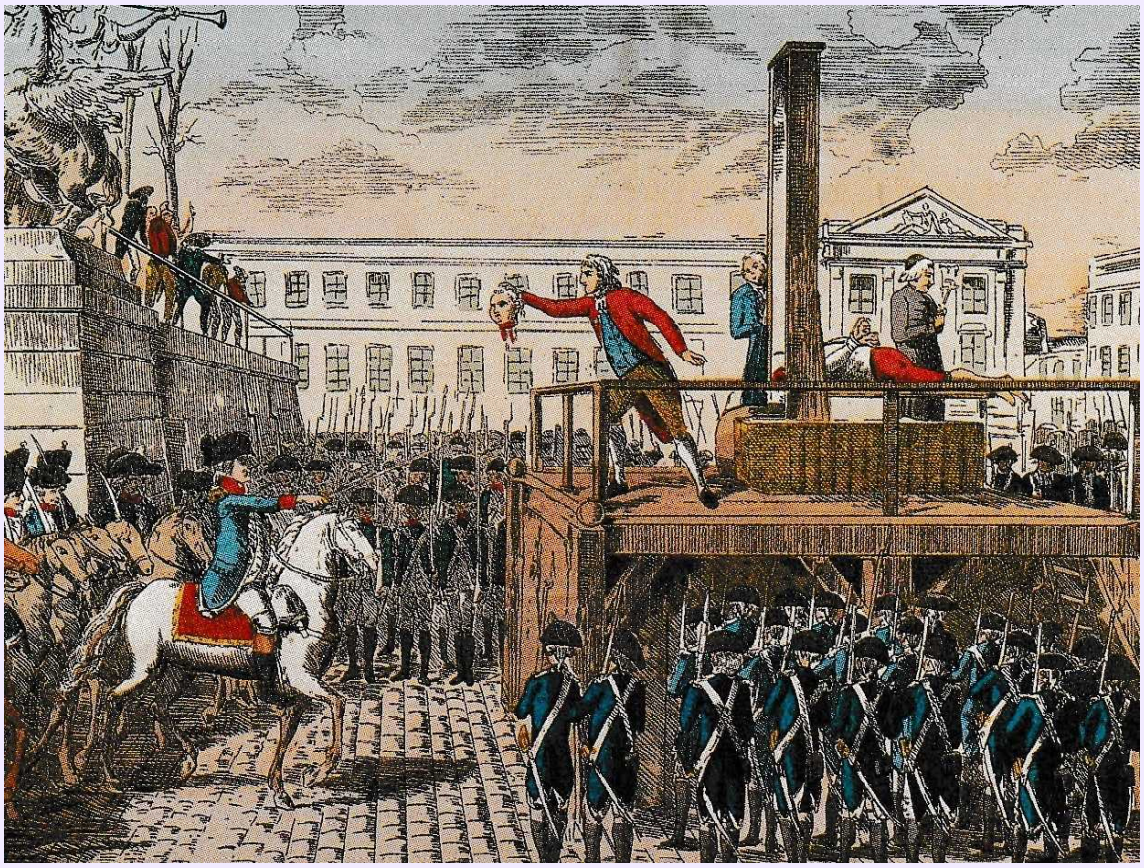
宗教オペラ

《カルメル会修道女の対話》のなぞ

2022/05/01



実話を小説に

ＮＨＫの木曜講座で、フランスの作曲家プーランクのオペラ《カルメル会修道女の対話》を観ることにしています。1794 年７月、フランス革命下で起きた実話に基づく断頭事件のオペラです。１６名の修道女たちがギロチンによって次々と首をはねられる恐ろしいオペラです。

実話とは言え、生き残った修道女の一人マザー・マリーが書いた手記を小説にしたのをプーランクがオペラにしました。オペラの主人公は架空の人物ブランシュです。手記を小説にしたので、事件の報告が物語仕立てになっていて、「一人の貴族の娘になにが起きたのか？」「そのとき、宗教はどんな役割を果たしたのか？」「宗教オペラとはなにか？」が主題になっています。１６名の殉教を伝える「歴史劇」であると同時に、貴族の娘ブランシュが、宗教

によって、いかに恐怖心を克服して断頭台に上がることが出来たかを問う「宗教オペラ」でもあります。

オペラのあらすじ

侯爵家フォルス家の奥方が、街で、乗っていた馬車が暴徒に襲われ、生命からがらお屋敷にたどり着いた途端にショックのあまり娘を出産して亡くなります。そのときに産まれたブランシュ・デ・ラ・フォルスは、自分の姓「力の(ド•ラ•フォルス)」にも関わらず、なにごとにも恐れを抱く弱い娘として育ちました。ある日、自分の恐怖心を克服しようと修道院へ入ることを決意します。父親も、兄も、反対しますが、意志は固く、パリ郊外のコンピエーニュにある古い修道院カルメル会を訪ねます。「強くなりたい」と願うブランシュに、院長は、「この修道院は祈りの場です。ここで強くなりたいと願うのは幻想です」といさめますが、ブランシュの入会を認めます。

院長は重病でした。死を迎えた院長は、錯乱して、「死にたくない。死は怖い」と言いながら亡くなります。宗教は役に立たないと知ったブランシュは、修道院を抜け出して自分の屋敷へ戻ります。父は革命派の暴徒に殺され、兄は外国に亡命して、屋敷にはだれもいません。マザー・マリーがやって来て、「ここも危ないから修道院へ戻るように」といいます。ブランシュは、わが身に「絶望」していました。ブランシュは、外へ出るのを恐がってお屋敷に残ります。

修道院に、革命会議の人民委員がやって来て、修道女たちに死刑を申し渡します。第一身分の貴族と第二身分の僧は、第三身分の革命市民の敵です。コンピエーニュのカルメル会の修道女たちは、断頭台で首を刎(は)ねられることになりました。新しい院長は、「祈りは義務であり、殉教は褒美」と説きます。当日、修道女たちは聖歌を歌いながら殺されて行きます。隠れていたブランシュも、断頭台に登り、一緒に首を刎ねられて死にます。

Exécution des carmélites

ブランシュに勇気を与えたのなにか？

なんともむごたらしい物語です。でも、最後が気になります。恐怖から逃げ廻っていたブランシュでしたが、最期には、自らが、恐ろしい断頭台に登って死ぬのです。あれほど、死を恐れていた娘が、どうしてこんなに強くなったのでしょうか？　その答えは、このオペラのどこにも述べられていません。オペラでは、ブランシュは、終幕で、突然、１５名の修道女の最後に現れて、１６番目の修道女として死んでいくのです。そのような勇気は、ブランシュのどこから産まれてきたのでしょうか？　なにが彼女を変えたのでしょうか？

このコンピエーニュのカルメル会では、「祈ることだけ」を教えています。ブランシュは、神になにを祈ったのでしょうか？　聖書にあるラテン語のいろいろな聖句なのでしょうか？　でも、このオペラのどこにも、そのことは述べられていません。考えられることは、処刑される修道女たちは、聖歌「サルヴェ・レジーナ：元后あわれみの母」（ラテン語: Salve　regina）を歌いながら、従容として、断頭台に向かうことです。この「従容」（しょうよう）と言う言葉は、特に、死に向かうときに使われます。英語でも、「accept one's death calmly：従容として死に就(つ)く＝落ち着いて自分の死を受け入れる」が例文としてあげられています。そして、聖歌「サルヴェ・レジーナ」は、カトリック教会の伝統的な聖歌で、聖母マリアへの祈りの歌です。

この祈りの歌を歌うことと従容として死に向かう覚悟とは、なにか関係があるのでしょうか？　それは、「絶望」（この涙の谷に泣き叫ぶ）の末の「救い」（我らを顧み給え）なのです。

> 元后、憐れみ深き御母、我らの命、慰め、及び望みなるマリア。
> 我ら逐謫（ちくたく：楽園追放）の身なるエワ(イヴ)の子なれば、御身に向かいて呼ばわり、この涙の谷に泣き叫びて、ひたすら仰ぎ望み奉る。
> ああ我らの代願者よ、憐れみの御眼（おんまなこ）もて、我らを顧み給え。
> また、この逐謫の終わらん後、尊き御子イエズスを、我らに示し給え。
> 寛容、仁慈、甘美にまします童貞マリア。

オペラでは、ブランシュ一人だけが、「サルヴェ・レジーナ」ではなく、聖体降臨節の晩課で歌われる「ベニ･クレアトル･スピリトゥス」（創り主なる聖霊、来たりたまえ）を歌います。死を前にしたブランシュは、このマリアへの祈りによって救われたことになります。この聖歌の最後は、次の聖句で締められています。

> 御父に御栄えあれ、死者のうちより甦り給いし御子と、
> 慰め主にまします聖霊に、世々に栄えあらんことを。アーメン。

お題目と称名念仏

落語の寄席の呼び物の一つに、「三題噺」（さんだいばなし）というのがあります。当日、落語を聞きにお出でいただいたお客さまから三つのお題をいただいて、それを即興的に一つの落語に組み込んで高座にかけるのです。このような三題話で成功した出し物として、「芝浜」と「鰍沢」（かじかざわ）が有名です。「鰍沢」では、客席から、「鉄砲」「卵酒」「毒消しの護符」という三つのお題が出されて、他の演者二、三人が高座で演じている間に楽屋で即席で噺を作り上げて、「え～、珍しいお噺でご機嫌をうかがいます。とある江戸の商人が冬の身延山参りに出ましたが、その帰り道に大雪に遭い、鰍沢近くで道に迷ってしまいました」と話を始めます。

商人が、夜が近づく中で「南無妙法蓮華経」とお題目を唱えて仏に祈りながら雪の中を進むと偶然にも一軒家を見つけます。一晩の宿を頼みます。家にいたのは元吉原遊廓で有名な遊女お熊です。いまは、心中未遂の相手で、熊の軟膏を作る猟師の妻となっています。商人がお金を持っていると知ったお熊は、毒の入った卵酒を飲ませて眠らせてしまいます。酒が切れたのでお熊は亭主の酒を買いに里へ出かけます。

留守の間に戻ってきた亭主は、残っていた卵酒を飲んでしまいます。帰ってきたお熊は、倒れて身体が動かない亭主にいきさつを話します。それを隣の部屋で聞いた商人は、慌てて外に出て、毒消しの護符を雪と一緒に飲み込んで逃げ出します。それに、気がついたお熊は鉄砲を持ってあとを追います。

崖っ淵まで追い詰められた商人が鰍沢に転げ落ちると、ちょうど下には繋いであった筏（いかだ）がありました。商人めがけて、崖の上からお熊が鉄砲を放つと筏にあたって、筏がバラバラに壊れます。商人は、壊れた筏の丸太の一本にしがみついて、必死になって、「南無妙法蓮華経、なむみょうほうれんげきょう」とお題目を称えながら、流されていき、お熊の魔手から逃れます。

商人は、安堵（あんど）の中で思います ― 「ああ、この大難を逃れたのも、お祖師さまのご利益（りやく:恩恵）。おザイモク（材木＝お題目）で助かった」。

これがオチです。

甲斐の身延山久遠寺は日蓮宗の総本山で、開祖日蓮を祀（ま）っています。日蓮宗は、「南無妙法蓮華経」（なむみょうほうれんげきょう:法蓮華経に帰依する）と「お題目」を唱えることを「釈迦の本懐にして最高無上」としています。絶望したときに称（とな）える最後のお祈りの言葉そのものが、仏さまなのです。

また、法然の浄土宗も、親鸞の浄土新宗も、「南無阿弥陀仏」（なむあみだぶつ:阿弥陀仏に帰依する）とお経を称える「称名念仏」（しょうみょうねんぶつ）が「阿弥陀仏の本願」（人間の根源的な悲願を実現した阿弥陀仏）なのです。仏に救いを求めるお祈りの言葉そのものが、仏さまなのです。

親鸞聖人は念仏について、その書『教行信証（きょうぎょうしんしょう）』で次のように述べています。

いはんやわが弥陀は名を以て物を接したまふ。ここを以て、耳に聞き口に諭するに、無辺の聖徳、識心に攬入す。永く仏種となりて頓に億劫の重罪を除き、無上菩提を獲証す。信に知んぬ、少善根にあらず、これ多功徳なり。

お分かりですか？　難しいですね。まずここでの阿弥陀仏は「名」となっている仏です。その「名」を耳に聞き、あるいは口に出して称えると、阿弥陀仏の尊い功徳(「聖徳」)が私たちの心(「識」)にまとめて入ってくるように(「攬入」)、一挙になだれ込むのです。そして、久しく仏になる種となり、知られざる過去から積み重ねてきた重罪がすみやかに除かれ(？)、悟り(「無上菩提」)を獲得するのです ― と宗教学者の阿満利麿(あまとしまろ)さんはいうのです。(『歎異抄にであう』55 頁)　「南無阿弥陀仏」と称えると、仏さまは、「阿弥陀仏」という名前になって私たちの心に入ってくるのです。その名を称えなければ阿弥陀仏はどこにもいません。お名前を呼べば、たちまち、心の中に現われて私たちを守ってくださるのです。称名こそが、仏なのです。

カルメル会修道女たちは聖歌「サルヴェ・レジーナ」を歌い、ブランシュは聖歌「ベニ･クレアトル･スピリトゥス」を歌って、従容として死んでいったのです。そのとき、神は、修道女たちとブランシュと一緒においでになったのでしょう。お祈りの言葉が神さまなのです。

憑り代

このお祈りは、西欧で言う「カタルシス」（浄化）でもあります。しかし、「カタルシス」と「お祈り」（聖句やお題目やお念仏など）が根本的に違うのは、「カタルシス」は不安や恐れや後悔や復讐の念をまるまるリセットすることにあります。『平家物語』で、壇ノ浦の那須与一が、平氏の舟が掲げる扇の的を射ようと海に馬を乗り入れると弓を構え、「南無八幡大菩薩」と神仏の加護を唱えて鏑矢を放った。矢は見事に扇の柄を射抜き、矢は海に落ち、扇は空を舞い上がった。しばらく春風に一もみ二もみされ、そしてさっと海に落ちた。この「南無八幡大菩薩」と唱えたのは、明らかに精神の集中を図り、心を鎮めるためのカタルシスです。一方、「お祈り」は、そういった不安や恐れや後悔や復讐の念を心に残したまま、神や仏に救いを求めることにあります。それは、「お祈り」をする本人が、神や仏が宿る「憑り代」（よりしろ）となるからです。古くからある大きな木や大きな岩や磐（いわ）と同じです。本人の正体や性格や罪深さは、そのままです。『歎異抄』でいえば、「悪人」は悪人のままです。また、難しくなりました。

例えば、この「憑り代」については、福澤諭吉も考え違いしていたようです。福澤の『福翁自伝』に次のようなご自慢の幼き日の武勇伝が出て来ます。

> ソレカラ一つも二つも年を取れば自（おのず）から度胸も好（よく）なったと見えて、年寄などの話にする神罰（しんばつ）冥罰（みょうばつ）なんと云ことは大嘘（だいうそ）だと独り自から信じ切って、今度は一つ稲荷様を見て遣（やろ）うと云う野心を起して、私の養子になって居た叔父さまの家の稲荷の社（やしろ）の中には何が這入って居るか知らぬと明けて見たら、石が這入て居るから、その石を打擲（うちやっ）て仕舞って代りの石を拾うて入れて置き、又隣家の下村と云う屋敷の稲荷様を明けて見れば、神体は何か木の札（ふだ）で、之も取って棄てゝ仕舞い平気な顔して居ると、間もなく初午（はつうま）になって、幟（のぼり）を立てたり大鼓を叩いたり御神酒（おみき）を上げてワイ～して居るから、私は可笑（おかし）い。「馬鹿め、乃公（おれ）の入れて置いた石に御神酒を上げて拝んでるとは面白い」と、独（ひと）り嬉しがって居たと云うような訳で、幼少の時から神様が怖いだの仏様が有難いだの云うことは一寸（ちょい）ともない。卜筮（うらない）呪詛（まじない）一切不信仰で、狐狸（きつねたぬき）が付くと云うようなことは初めから馬鹿にして少しも信じない。小供ながらも精神は誠にカラリとしたものでした。

科学的な精神の持ち主の福澤でしたが、石ころやお札が神さまやお稲荷さまのご神体だと勘違いしています。これは、神さまやお稲荷さまではなくて、神さまなどが降りてくるときの「座」です。石や岩なら「磐座」（いわくら）です。たんなる憑り代です。「神の椅子」にすぎないのです。

都築正道